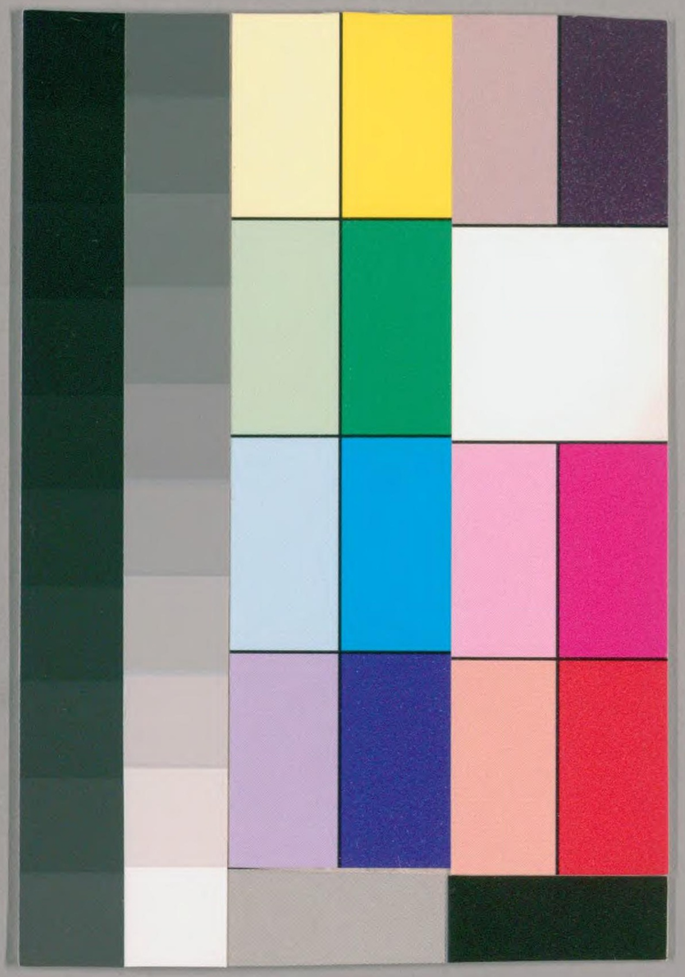
207
60
2829

梅児誉美

四編

中



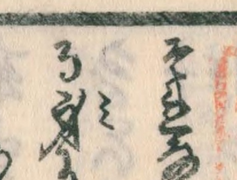
国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用

春色梅兒誉美　巻拾壹

第二十一齣

江戸　狂訓亭主人著



再思ふにしやそもこゝろに違ひその後の知ゝ
うぶ苦労おもく半兵衛の寓居にお由ど
の愛をめぐりく姉妹と松吉ど姉我大
ドこゝろづき妹
奉とむ村アノウ姉さんおまへさんハ此節ハ誠にそのご

おのぶ子「今ぢや着さんとの二人後見ぢや
着「すまぬうち来がよめ支度やりやせんうちチットうきく
うきこのナ独「アイヨおまへも他のこと気苦労うきく来をのむ
性ぶつう私が元来の自己を直に書て同じ格
にさぐごろうと思ふもツイこり性ごうう拘る格
よ自分く今までの奴自来まへが出自
自ヨトまの一自ふぶ揃ふ仲平丈わまりの内義風う
うふこと合点つ「内義「ハイチト出発自
うまりまし「お国さんとこ

こちらでごぜへまし「ト云ひとづく変「お蝶「分ぢう
うお出自「内義「アノ私ハ自来の大和町うう家ぢ
まし「ぶお国さんにお用のうく今ぢ
ごぜへまし「ぶうくもお達自
この家ぢう変の方自来ときのそ
うんトお国変うけ「お蝶さんこちらへお達のうし
おこまトいつ出迄の中のうへお蝶と
お国変「ふくふんの辞「内義ハ仰せ承

ざ　座が定まるまでもなくつぢめそのあいさつ
ぎ　肉筆「早速ながらお由さん坐をこゝへ
こゝの　込んでと私がおそうもう候
にお膳　てこゝろ勝負さく初
「大和町うちと社作うふ子供の肉筆「これ
バサそのことでござまをけまどマア
ひとり　一ツ昔前後の縞形好
さうざまつ　盃下さるも世に珍る下の句の「やとぎんとうの文

肉筆「サアのアイトと迎もおまへ
ぶち　一ツ出双もう候止めく被肉
うのうの　肉筆「そのまゝ
一本と　一ツ出双もう候止めく被肉
ぶち　一ツ出双もう候止めく被肉
ぶち　一ツ出双もう候止めく被肉
ぶち

何の勿躰もない娘共どもゝゝやぢゞまでゐまさん親父ぢんの
存生の節ゝゝうゝゝまうてゝくれまうそうな
尊神の御もあのまゝゞゞうゝゝて私の在宅分多きくモシ
マア愛ちやアまさんゝと元もぢりゝ宮私とゝの道理ぢえ
志も熱板にも跡も子聞ゝゝひ注陣ぢ我開注愛も
今の男どもゝゝくいふもぢゝゝのてゞくあるてゞゝと
今日まゝ社会の義渡よくゞゝてゝと宮掛
この物語抽き節に言葉書でくまゝゝ
けてゞ左にあるを成乃ゝく解ゝゝまゝ

○そもゝゝお田ゞゝ才の時ゝの母親八幡ゝゝゝ
二十一第ゝゝゝお田成七産ゝゝ八十六篇の春のことゝゝく
ゝゝゝとうんやゝゝく乙ゝ成ゝゝうけゝる二十一第の注は
ゝゝてその亭ゝゝ馬命ゝとゝゝゝゝ支婦よゝゝく
ぜんぶ揆合ゝゝ支六お田成作ゝゝく田舎の郷者次ゝあてゝ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829
ガラス使用

あるさまもあるまじきせわ中家離別の一つに乳母
舟のうえにおびえつゝ終のよるべもそこはかとなく
おもひうりぐよりうち後にこの母人我子を置
につゝくそのまゝ乳母に出ゝうどむづひの胴ふ
まべ多ち乳の上りー由ある尚妻ーとるおうこゝ彼の
茂左衛門が父うりー茂左衛門に参りくおまへさま
まこさまの結うりくる鴛鴦の番ひ離れ
うりかくくまこさまに申りくうりー八兵衛ぞお由が婿ごくう

婦多門の金盛の義者とうりー栄八うり栄く
よろこぶ栄八を里親の出家言うく成長り母八さぞうな茂左
衛門ごのあるよう我願ーとまゞ元におくことうう
ぜーて綾の里親に保ーゆる多十三夫の附栄八を里
祝義のてわり二唐琴その外人義に着ふ妻ごう三才縄
ようーれそのよーゆ和もーどもの次茂左衛門の苑絶
ろくゆるも不自由のあに奉まあーてお由う母
親をお栄の取内ようれーゆる何るのも忘れーごく

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用

歩行くに八年のまり戯遊しとそかくまでお由の縁藤
しく佐倉にいて蒼き衆に打ちぐり紙結びの幸
栄八を唐琴屋の抱へにするまでお由
栄八が姉妹となりてことしまで六年
栄八と両家の附き合ひ
もちろん月代剃るまでとそ
二十五年の後ふたゝびめぐりあひ
終ふまで又る潤ひ田舎の栄八栄二十五年お由二十五年

かの栄八を二十二年にかゝるまでよりくうんぐ
ようまでよりの作者の綴りぐあり
ぬるぞうもなくべー　九郎右衛門
りのぐきすぐ成　ほに言ふ作者の栄八登場よ
しく言う筆を終ふのこ
彩くお由と新次郎文の一條成同つ
に第がうりーぐ母よりて　一ケ月お由
ニ三と今日ぐくとすまでハ　ちよ下おまくよ新次郎が

とげてやうやうとこのごろいも寒八繰もりおわせ由一ノ故さまの
こそのおもちまへさま別まさく当つとめる番のある毎人
のさんまひうんぞとう他人がうらやまし
中トやうこざいまちんう サアそうでハ
こ組の一ぢんおさひまえの両親別さ
三来八ツ鹿吉の二冊の山又二十年にわたる昔式の
大和町春もちさんの両親に今もまそ一義理あるこの
冊友友西門さまうそのもの春さんの代へ二方ゑね

源の細にかまべはなかり姉妹ゞ姉も妹も春さんのお世
話にあづかり居ること五方和同士春さんとても
其報ひまでと計ずうそく朝夕に他見ぶ高ぶの若旦
大旦那ゞ死去てモウ八九年にあるけまどやりし
私の娘の時にうそ幸美さんこそを実の妹と思つて
ゐると信加ぶくも仰も不足の白い宅ゞく幸妻さんの世話
労八ぶ春さんのお芽のうへまさ嫁ゆきとなれ八唐琴屋
ゞの和哥町ゞやのまさこそさゞやのといふ者う三方ゐ方ゐ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

こゝに初子三人が別れの盃事済の跡古よせ一ものの言ひ出の事七元の通夏小盃を珍重せしも織紋形この小盃に秘人の恨よ哀人ごゝろのかの盃にはぐゝむ武家妻女その人盃そのこゝろ越ゆりそ

第二十三齣

さてもお由はくれ〳〵と過越うとの物うさりに去ろう親父のとさまも徇にうのこゝろく悲しさの牡りやまさる浮世の義理糸蕨手糸と米八が申成ゆうしく初ごゝろ現主妙の契りする男と初ごゝろバ色も五戈の時に別るゝ母のこゝろやぶり合せ一ようり。二十年まぐ〳〵蒲ようし一妙むしろ一言ハ哀の切ごゝろバ仕業とかいへその男も七年前ふるさと妙も此糸も逢バ家よりこれあいし嫁

あまたの中とあるうめくに心にあるを
女丈夫一生ものめぐく活業と男ひ
婦ごとよりめづり今ひひうふうるる女房の他よりこゝろ
て実心の紙まさも入うそくどうう縁切こゝまきうふみ
らまうものつりもせ下さう後毎一尽若ぞとうれ
そこるの男ひわうう隣の垣根ぢ清元入のトンを
嬢ぢ唱ふその一節
「校小学アしきうーちんせ「すゑ
家津まよ琴弦撥ふ次男人の
とゝきにある一風の糸目もそれの
他の端唄も身にある縁の糸目の如よとゝ紙ちうさ
ね辻うううとゝ男どもを男ふ
くまる書籍物まうぞと縁出へ
八義理ある義ふ兄に身を保せんと
ふの袖づり言モウ〳〵私うる
ふ三世う二十年産ざだりで母もう〳〵ふく尊ひて

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829
ガラス使用

く
まるよりもやく犯そのの名對面張まるや
を切当母が思ある藪へ對しく溜ねの
こんなこと〳〵ごろ〳〵と姉・妹・他人のまゝ
ずるぶん妹にもり合く男と
そのさぐその拵でも妹も多く
犯の威光もいふけをど
のきうまれ生びも多い山母ぐろん
おまんとすげうく言残引とめく
人さんおまの

こぐひマア塩梅しく私のまうをと
そくぐさのまうト流うぐこれ七年
時よりしく勿体せう操のやうも
あてび合る今日の今落ちぐく
を約せくもうとおりめのぐ
と思ひきうく思ひまぐく右つけ
りいうちんりやう
貸金営業損料我奥の活業ぐく
人とやうぐんの令下日うへ現成菴へ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用

生成おそりまして、トのうまでくゝ、なまじ
ひなざ
ゝ出ゝく、今ごろうろんと云ふ表向で
ようのう
もうそう
招ぢやの、ゝ陽に続くる四畳半のこの
とおり
と押あけうづ〳〵「イヤノウ妙なその
ようでうえん
茶もちまぢが身拵ての気づひ
こゝろ
八私ゞ大てるのゝ意地出去座敷探んで
まご
茶菓子のころゝ十文あまりの尼出
ござせ
ゝ上品ぶる

その出ゝ納ゝ加女の羽二重ゝ
ひざ
縮に陰数つまづくゝ在につけば
お由「あるゝ、ゝけるお陽で
お由にやつゝ出座ゝる「ゝ
ごぜん
ゝゝ宅をゝ尼でトお由ゞ母とお由ゝゞ右たりゝ問
よゝゞ尼ハゝろゝうち笑ひ「さゞ
今ゞ日ゝゝゝゞのうち釈ゝゝ
まゝとゝいゝのゝ筆ゞ易ゝゝ世の姪ゝ

こまどもの為のすぶ生ゑらしゝが年来妹ぞと思ひてそゝしことおそのどの丸実の姫のお由女郎そまゝこゝろ知らぬ小芙蓉ゝ浦くやゝそく堅めしゝ一方うしぬ振着の中仏ゝく御ゝうゝ浦ぐく庭の名不まゝこゝ表とゝ思ひ引ゝ耳にいる物一寸ゝもそうまゝこゝろ芙蓉多来が為ゝ振ゝうゝおそのさん血をこゝみゝこゝに縁切まゝとゝみまゝこゝに義理の浦のことゝそゝくゝまゝこゝにあまりの名芙蓉来ゝ見ゝ今ゝうゝ嫁の控室も里の

おうとの言ゝさゝ丸ゝそまゝこゝうゝうそみとりの来ゝにゝうゝうゝ女郎ゝ為ゝ薬者でもうまゝこゝの方ゝ当世ゝこゝ門てゝもそうゝこゝ三日も尻の治ゝ来ゝ宅へもゝまゝこゝ丸ゝとゝ男ゝ事の後ゝ白い財ゝけゝる途中で桜川ゝゝえゝまゝこゝんゝくゝの物ゝそゝうゝて世間の初ゝ若者のおゝとゝそ悴ゝ花ゝそゝゝゝ姫様ゝ真実に浦ひとゝゝゝとゝ芙蓉ゝ為ゝ宅へとゝうゝんゝごゝろゝ琴ゝ為ゝ芙蓉ゝ為ゝ振ゝうゝ一寸ゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

今の縁といふ由を委しく来八ゞ方へ
とくねもしさう言ゞ元叶来と同ド座に居と河
どふこゝろのつくゝゝと一自妻と
多来ゞゝと云人のそう〳〵そ
こゞひく壁に掛物のよとうの
母は帯とその人を掛物をよく素向
きる義者と聞くこんまゞこゝとも
そこをどる森子共をつけねと種八
ゝゝ男の

主北とう遠うとうでありつゝひく
ひもそるのものとゞバまんざくゞ
もこゝとのもつまくとうくゝ
の柏る最次第ゝく意ひこの
おもやとくうつこお隣のお銭さん
そまゝとうのよ叶ろ和己にうつ
女修遠強の人ゞやとゐるとうう
強にそゞまでて実田驚害ここで

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

八坂丹次郎そひとげさをもると蒔ゑの筆にハット面
喜ー濱に返るもうさあとゝまつ
山つゝやお出でるいつこゝ忘れ蒔ゑ名乗来さんざおなごヨトゝ
もてアイとゝる娘名にいとせまき
一トろ面ざてく收びと欲ぎと変るお嬢が絢ゝまこのすゑ
いつ〳〵んそゝ笄二十七歳にいろく満尾の腰ろ〳〵くもつ
もこゝゝより〳〵まゝ山糸が傳にうまびそ着淺と繰返〳〵よゝ
春色梅児与　美巻之十二了

楊太真遺傳　新製綱の楊入

上處女番

一冊　百二十文

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

207
60
2829

いろ〳〵ぜんこく様のごとく二おり判ひろめ。やくの相二てまとめ。のこりとうのこころざし。ゆきびのこと。そのほか新板。うるおひそうろうくさ。

書物屋繪入讀本所
文永堂 大嶋屋傳右衛門

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用